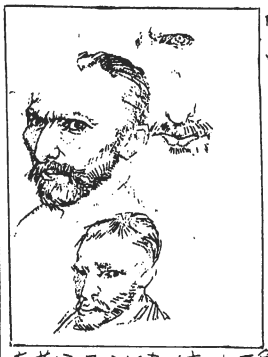
‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

15号 1990.7.22

文・編集・発行
恋怪子

LIVE：ボイラーズ 1990.7.11 高円寺 LAZY WAYS



「名声などというものは天才には必要ないとブレークは信じていた。人間は一人きりで生まれいで、一人きりで死ぬ。他人との関係をのさばらして、自分本来の孤独をうっかり忘れてしまう人間は、阿呆の天国に住んでいるのだ。」

「こうしてブレークは、ニーチェ、ドストエフスキー、ヘッセらと同じ意見をいだき、前進することによって生命を充実させ、意識を深めることができると信じる。自殺も精神的自殺も『存在の訪れしことなき虚構の宿』を考えることも、けっして解決とはならない。死後の天国も問題外であり、道はただ一つ、より充実した生命を求めて前進する以外にない。ヴァン・ゴッホはピストル自殺してはて、ニーチェは発狂したが、ラスコリーニコフとミーチャ・カラマーゾフは『アウトサイダー』問題への解答となるおそるべき十字架の体験を生きぬいた。あくまで試練をうけいれ、死を選ぶことなく『さらに深く罪の底へ、どこまでも人生の内奥へ』つきすすむこと、十年間の流刑に甘んじて、浄化を完成することこそ必要なのだ。人生そのものが流刑であり、故郷への帰路は前方にある。」

コリン・ウィルソン著『アウトサイダー』より

アムステルダム中央駅の前の広場で、ギター、キーボード兼ヴォーカル、ドラムという編成のストリートバンドをきいた。その人たちがドイツへ行くという前の日まで、毎日ここにいるような気がしてくる。ジミ・ヘンドリックスの曲をちょうどやっていたときは!!!となった。よかった!

ライブハウスの入口でボイラーズのスタッフの人からチケットを買ったときにチラシをもらった。それにはライブスケジュールの他に「この日(9/6)でBOILERSは活動停止期間に入ります。今後のことは未定です」と書いてあった。わきあがってくるものをおさえたまま、その場を離れ、近くのコーヒー店に入った。2階の、大きく開いた窓からは外がよく見え、駅には電車がひんぱんに入ってきては出ていき、たくさんの人たちがいきかっている。それをぼんやりと見ながら心の中で「そうなのか、ボイラーズはおわるのか」と何回もつぶやいていた。

私は、いつだって「明日」の存在を信じて「今日」をすごすことができないでいるから、ボイラーズのライブだって、次を楽しみにはしていたけど、次のライブの存在を信じきって、その時のライブをたなあげしてきいたことはない。一回一回が私にとっての永遠だった。だから、これでボイラーズがおわっても、私にはボイラーズに想いを残すものはない。できることは全部やったから。もしかしたら出会うことすらなかったのかもしれないのだし、一回一回の現在(ライブ)を生きつくさなかったら、ここまで来られなかったかもしれないのだ。

ボイラーズがあと一回のライブでおわることを知らなかったら、多分ちがった感想がでたと思うけど、ボイラーズがおわることを知ってそれからライブを見たのだから、そのことが心の中にあって働いていたことはたしかだ。でもこのときだけが、とくべつにそうだったのではなくて、いつだって、ライブのはじまる瞬間まで生きてきたこと全部が心の中で働いているのだ。だから、私は一回一回のライブに、それまでの自分の生涯を働かせていることになる。そして、現在に収斂しているそれまでの自分の生涯を肯定できて、それを前進させることができる、そういうライブを求めているのだろう。「アウトサイダー」に書かれているように「前進することによって生命を充実させ、意識を深めること」が、そして「さらに深く罪の底へ、どこまでも人生の内奥へ、つきすすむこと」がボイラーズをきくことによってできた。この日「マザコン・ブルース」でヴォーカルの人が「鼻たれの頃の歌はもう歌えない」と歌うのをきいていて、「鼻たれの頃の歌」を歌えなくなったからボイラーズはおわるのだろうと思った。「鼻たれの頃」って実際に鼻をたらしている子どもの頃のことだけをいうんじゃない。前進をつづけていれば、その前の瞬間はもう「鼻たれの頃」になるのだ。

今までのボイラーズのライブの感想を付録にしましたので、よかったら読んで下さい。

WORDS：井上ひさし（週刊文春7月12号「ロックの歌詞」より）

なにしろ三日に二組の割合でロック・バンドが商業的なデビューを果たし、全国で一日に三千の、大小のロック・コンサートが開かれているというから大変な隆盛ぶりである。

この音楽は、周知のように、若者たちが自身の価値観や自己主張を破壊的なサウンド（死ぬかと思うほどでかいボリューム）で訴えかけてくる式のもので、あの身体に響いてくる暴力的な音の嵐がいやでこれまで敬して遠ざけてきた。ところがレコード店で小さな音量で試聴してから考えが変った。なかなかどうして歌詞がいいのだ。業界筋に聞くと、いい歌詞がつくれないグループは、ほかにどんな取得があっても人気が出ないという。そして若いロック・ファンは、家でCDをかけてしっかりと歌詞を憶える一方、コンサート会場では歌詞を忘れてただただ音の嵐に身を任せて踊り狂うということになっているそうだ。（中略）

ところで今のブームでもっとも目立つのは「成長を拒否して少年のまま現実には参加したくない型」の歌詞だろう。

ジョン・スカイ ウォーカーズ「いつもここにいるよ」
同「エルマーの夢」、X「EAST EIGHT RAMBLING」
有頂天「EVERYDAY BIRTHDAY'S TRIP」
BOOWY「ON MY BEAT」の歌詞の一部が書かれている。

成長拒否と、それと対になった現実拒否。これまでにあまりなかった型である。七〇年代に登場したパンク・ロックは社会＝現実への諷刺を主な武器にして大人たちの度肝を抜いた。ところが今は、「パンクはイヤ、おことわり」という若い人がじつに多い。これもまた或る種の現実拒否である。「現実も未来も暗い。がそれでもとにかく……型」と「少年のままでいたい現実には参加したくない型」の歌詞の全盛――。どうやらわれわれ大人たちは、若い人が入ってきにくい世界をつくり上げてしまったらしい。

LIVE：RIP VAN WINK 1990.6.18 新宿ロフト

ギターを弾きながら「毛虫の歌」を歌うシュウジの笑顔に、もしあったとしても、あまりにも遠い以前のことで、もう私にそれがあったとは思われない赤児の無垢を見た。シュウジは、あのときはほんとうに「毛虫と話ができたらいいなぁ」と感じて、その世界にいたんだと思う。シュウジに顕著にそれがでていたけどあの日のRIP VAN WINKには赤児の無垢があった。歌詞もステージも実にこどもっぽいのだが、やっているのが赤児ならばそれは真実ということになる。自分に幾重にもまとわりついているものをはがしていかないと、私には、あの赤児の無垢を実感することはできない。

LIVE：LIP CREAM 1990.7.14 下北沢屋根裏

狭いライブハウスの中は人がいっぱいで、うしろの方で立っているだけでも汗がふきでてくる。さいしょが金欠アレイで、次がLIP CREAMだった。はじまりの音からガーンとなるパワーがある。この日は、歌詞は全然ききとれなかったし、前の方で背の高い人が何人もとびはね、こぶしをふりあげているので、ほとんどステージが見えなかったけれど、それでもすごいステージだった。半分くらいは目を閉じてきいていた。LIP CREAMは滝の落下の轟(とどろ)きたるさまを感じさせる。きいている私はまるで滝に打たれているようだ。心が反応するんじゃないし、思考が促されるんでもない。心も頭も空っぽになる。座禅をしたあとの空っぽにとてもよく似た空っぽ。

LIVE：ジャンキー・モンキー 1990.7.16 吉祥寺曼荼羅

ヴォーカルの人は海水パンツ(?)にスニーカーといういでたち。ジャンキー・モンキーの100点のライブってどんなものかわからないけど、この日は75点くらいなんじゃないかって感じがした。ジャンキー・モンキーの世界には血の匂いと感触がある。なまあたたかな。そして歌には人を地面にはいつくばらせるものがある。地面にはいつくばって、そこから人間のさまを見る！といっているみたいだ。

記事の他によかったLIVE：9/7 LIP CREAM 20000V（この日のもう一つのバンドCLUB LATEXAは以前きいたフリージャズのあと。）
DEATH ANGEL 9/10 中野サンプラザ リズムギターの人がとってもよかった。演奏の要になっているような感じでリズムギターの人ばかり見ていた。
9/17 ディランザウルス ラ・マ（次号に書きます）